Column 3

イルカのお刺身――是か非か

浜口　尚

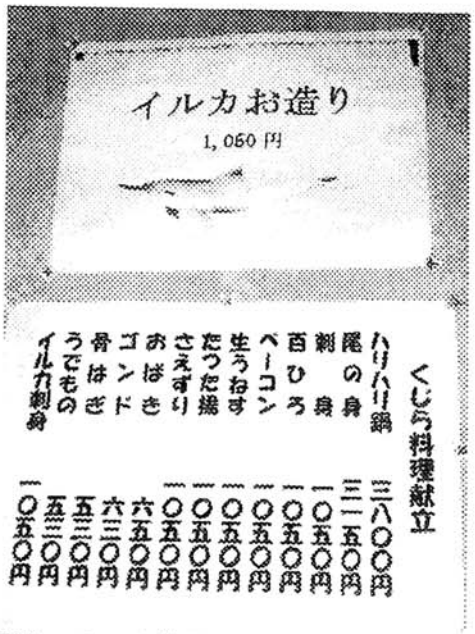
女子大で捕鯨文化を教え始めて15年以上が経つ。鯨を食べることに抵抗を感じる学生はほとんどいないが、イルカとなると別である。鯨もイルカも生物学的にはクジラ目（もく）に含まれる生き物であると説明しても簡単には納得しない。彼女たちにとって鯨は食べるものであっても、イルカは水族館で観るものなのである。そんな時は「百聞は一食に如かず」である。学外実習の途中、イルカ料理を提供している料理店に連れて行く（写真参照）。食べる学生もいれば、食べない学生もいる。それでいいのである。彼女たちなりに「イルカ食」を考え、彼女たちなりに判断しているはずである。それが異文化理解・自文化理解への第一歩につながると筆者は考えている。

2010年、和歌山県太地町において行なわれている鯨・イルカ類の追い込み漁を隠し撮りして製作された映画『ザ・コーブ』がアカデミー賞を受賞した。元イルカ調教師が自己の悔悛を宣伝し、活動資金を獲得するために太地町民を愚弄、茶化しただけの映画である。フィクションとして、あるいはエンターテイメントとしてみれば、それなりの楽しみ方もあるが（勝手に出演させられた水産庁のMさんはよくがんばっていた）、ドキュメンタリー映画を装っているから、たちが悪い。あれは作り物です、念のため。

2003年11月、そのコーブの舞台となった太地町畠尻湾に追い込まれたハナゴンドウを救おうとして漁網を切断したシーシェパードのメンバー２人が威力業務妨害、器物損壊ほかの容疑で逮捕された。彼らは22日間の拘留の後、略式起訴され、罰金80万円を支払い、国外強制退去処分となった。漁網は２重に張られてため、イルカは１頭も逃げ出していなかったが、ホームページ上では「イルカ15頭を救出した」となっていた。

2011年３月11日、東日本大震災が起こった当日、シーシェパードのメンバー６人は岩手県大槌町においてイシイルカの突きん棒漁をビデオ撮影していた。運良く高台にいたため、その後の大津波に巻き込まれることもなく、全員が無事に出国した。メンバーの１人はホームページ上に「この日、私たちに示された親切心と寛容さがいかに大きかったかは書き表すことはできない。日本人は心温かく、親切であるという私の信念を確証した」と被災地で受けた諸々の親切に対する感謝の気持ちを書き記している。

その一方、大津波により壊滅的な打撃を受けた大槌町内の写真と「女性メンバー２人が１匹の魚を救出している写真」を並列して掲載するなど、無神経なことを平気で行なっている。イルカとは異なり、煮ても焼いても食えない輩なのである。



「鯨・イルカ料理メニュー」
（和歌山県那智勝浦町の料理店、2008年）